

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

旧制台北高等学校の教育と音楽活動：
多文化共生を目指した教養教育

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/886

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



旧制台北高等学校の教育と音楽活動

——多文化共生を目指した教養教育——

下道 郁子

はじめに

教養教育と寮制を特徴とした旧制高等学校においては、寮祭や校友会活動等の課外活動が活発であり、その中で学生の音楽文化が豊かに育まれていた。第一高等学校音楽部主催の音楽会は、日本の西洋音楽の受容と普及の重要な場の一つであった。また第一高等学校と第三高等学校の野球部の対抗試合の応援歌合戦は、学生達の歌う活動を活発化したと共に、「嗚呼玉杯」や「紅もゆる」等の寮歌を伝播させる要因となった。そしてこれらの名寮歌が全国的な愛唱歌となったことは、明治維新以降の新たな大衆音楽文化の産出と発展に、彼らの音楽文化が少なからず影響力を持った証しと言えよう。課外活動ではあったが、独学独習に留まらず、例えば第一高等学校の音楽部の顧問として島崎赤太郎や弘田竜太郎等プロの音楽家が指導にあたり、「嗚呼玉杯」の作曲者楠正一や音楽学者となった田辺尚雄のように、東京音楽学校の選科に通って専門的な教育を受ける学生もいたり、旧制高等学校の学生音楽文化は、学生達の熱意と真摯な研鑽を基盤に生み出されていた¹。

第一高等学校の学生の音楽活動を考察する過程で、西洋音楽と日本の伝統音楽、芸術音楽と大衆音楽、学生の音楽と専門家の音楽といった多様な文化的融合が行われていたことが見えてきた。多文化共生と言われる昨今であるが、日本の欧米化政策と植民地政策の時代に設置、発展した旧制高等学校の教育と学生文化は、“グローバル”で多文化共生型であったと言えるのかもしれない。特に、外地の高等教育機関においては、内地以上に多文化を意識する教育が行われたと考えられる。

本研究では日本の外地における教育と文化との関わりの考察を試みるべく、旧製の台北高等学校の教育と音楽活動に着目して、考察を進めていく。台北高等学校を研究対象としたのは、(1) 課外での音楽活動が盛んであった、(2) 7年制で尋常科があったため、音楽科の授業があった、(3) 台北帝国大学等の他の高等教育機関との交流があった、(4) 廃校となった後も、国立台

1 拙著「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽活動」、「明治20年代～40年代の旧制高等学校の音楽教育—特に第一高等学校の音楽活動を中心に—」、「大正時代の第一高等学校の寮歌の研究—旧制高校の教育と音楽的側面からの検討—」に詳しい

湾師範大学が校舎を継承、資料室が整備され、外地の学校としては比較的資料が残っている、等の理由からである。また、日本統治下の台湾の音楽教育研究は、唱歌教育や同化教育という視点では行われているが、高等教育の音楽教育や文化活動に焦点を当てたものは少ない。本研究をとおして、日本統治下の台湾の高等教育において、西洋音楽の受容と普及がどのように行われたのか、また外地という環境の中で、日本と現地との文化交流がどのように進められたのかを、検討していく。

1 日本統治時代の教育制度—第二次台湾教育令まで

フォルモサ「美しい島」というポルトガル語を別称にもつ台湾は、オランダ統治時代（1624-1662）、鄭氏政権時代（1662-1683）、清朝統治時代（1683-1895）を経て、日清戦争後の下関条約によって1895年に日本に割譲され、日本統治下に置かれることになった。このような歴史の変遷の中で、独自の風習や言語を持つ原住民達は、その時々統治者の教化政策の下、差別的な扱いを受けてきた。現在台湾原住民はアミ族、タイヤル族等14の原住民族が台湾政府によって認定されている。オランダ統治時代には、ローマ字による言語教育が行われた。清朝統治時代は、台湾原住民は「番人」と呼ばれ、中国大陸から移民した漢民族とは居住地域に境界線を引いて分けられる等、差別されてきた。さらに清朝の統治を受け入れ漢人化したものは「熟番」、統治外で全く教化を受け入れなかった原住民は「生番」と呼ばれ区別されたが、台湾の統治を始めた日本も、この清朝の分類を引き継いだ。

このように日本統治下の台湾は、大陸から移住してきた漢人、非漢族である原住民、その時々統治を受け入れた原住民と教化されなかった原住民という多民族による多言語、多文化という状況であった。ここに新たに「日本人」が加わることになったわけで、このような状況の中、日本は「台湾人」に対し、国語教育による教化政策を推進することになった。内地と同様に唱歌教育が行われ普及したのも、音楽教育というよりは、国語教育の一貫として行われたと考えられる。

明治28年（1895）に台湾総督府初代学務部長に就任した伊沢修二は、西洋式の近代教育を行うために小学校を設置し、試験的に義務教育を始めた。翌年、日本語教育の普及を目的に各地に国語伝習所が開設される。明治31年（1898）には「台湾公立公学校規則」「台湾公立公学校官制」及び「公学校令」を發布、台湾籍児童に対して6年間の義務教育を実施する公学校を設置した。これらの法令では、科目（修身、作文、読書、習字、算術、唱歌、体操）、教師資格、休日等の実務規則も明文化されている。大正8年（1919）に第一次台湾教育令が公布され、「第一条 台湾ニ於ケル台湾人ノ教育ハ本令ニ依ル」と、台湾人の教育が系統化された。しかし小学校で教育を受ける日本籍の児童が通う学校が、内地の尋常小学校と同一の教育課程であるのに対し、台湾籍の児童が行く公学校は教育水準が低いという結果となった。また原住民児童に対しては、蕃人公学校又は蕃童教育所において初等義務教育が行われた。日本は「生蕃」を昭和10年（1935）に「高砂族」に改称している。

大正 11 年（1922）に第二次台湾教育令が公布、日本人と台湾人が同一の教育制度の下で、教育を受けることになった。いわゆる「内台共学」の実施である。

台湾教育令（大正 11 年勅令第 20 号）

第一条 台湾ニ於ケル教育ハ本令ニ依ル

第二条 国語ヲ常用スル者ノ初等教育ハ小学校令ニ依ル

第三条 国語ヲ常用セサル者ニ初等教育ヲ為ス学校ハ公学校トス

…中略（筆者による）

第六条 公学校ノ設立、廃止、教科、編制、設備及授業料等ニ関シテハ台湾総督ノ定ムル所ニ依ル

第七条 入学資格ニ関シテハ修業年限六年ノ公学校ノ卒業生ハ尋常小学校卒業生公学校高等科ノ第一学年修了者及卒業生ハ各高等小学校第一学年修了者及修業年限二年ノ高等小学校ノ卒業生ト看做ス

第八条 高等普通教育ハ中学校令、高等女学校令及高等学校令ニ依ル

この法令により、中等教育以上は内地と同じ制度となり、高等学校を設立することになった。内地の教育の延長と、現地における同化教育を推進するために、高等教育機関の充実が図られたのである。

2 台北高等学校

（1）概略

台北高等学校は大正 11 年（1922）4 月、総督府令による七年制の高等学校「台湾総督府高等学校」として発足、昭和 2 年（1927）に「台湾総督府台北高等学校」と改名される。発足時は台北州立台北中学校（後に台北第一中学校と改称）の一隅を借りて尋常科の授業を開始した。大正 15 年（1926）に台北市古亭町の新校舎に移転、そこを所在地と定める。校章は芭蕉の三葉の中央に高の字を配している。立地は台北市中心街の南の古亭原で、校地は約二万坪を有する広大なものであった。椰子の並木と赤レンガの瀟洒な 3 階建の本館を中心に、大講堂、高等科教室、理科の実験室、体育館、武道場、プール、そして学寮「七星寮」が広がっていた。二高（仙台）、七高（鹿児島）等の内地のナンバースクールのような歴史的な地ではないだけに、新しいものを築いていくという理想と気負い、強いフロンティア精神が台北高等学校のスクールカラーになった²。昭和 10 年の統計では、内地出身者の合格率が 32% に対し、台湾人は 3%

2 「旧制高校同窓会めぐり 台北高等学校蕉葉会」学士会『会報』1970 7 月

と少ない。だが、それだけに台湾人生徒は優秀であった。台湾の発展に寄与する人材育成が目的だったが、第一回卒業生受け入れのために設立した台北帝国大学に進学する者は少なく、統計によると、進学先は東京帝国大学がトップ、台北帝国大学は2位、京都帝国大学が3位であった。卒業生には作家の邱永漢、元中華民国総統李登輝、台湾の財界人の辜振甫、元最高裁判所判事園部逸夫、宇宙物理学者の小田稔等がいる。昭和20年（1945）台北高等学校は、台湾省立台北高級中学校と改名された。昭和24年（1949）に台北高級中学校が最期の卒業生を送り出し、完全に廃校となる。卒業生総数は2472人でうち台湾人は558人であった。校舎は台湾師範大学として現在も継承され、各校舎には歴史を説明した看板が掲げられている。また図書館8階には、「臺北高等学校資料室」が開設され、資料の保存と展示が行われており、台北高等学校が台湾の近代教育の発展に重要な役割を果たしたことを、今に伝えている。

（2）七年制高等学校

台北高等学校は、日本初の七年制高等学校であった³。第二次台湾教育令が公布された大正11年（1922）に台湾総督府所管学校として尋常科が開設、1年生40名、2年生40名が同時に入学した。七年制高等学校は、大正7年の新高等学校令で示された方向性である。小学校卒業時点で、帝国大学への切符を手にするというメリットがあり、高等科で外部の中学校から生徒を受け入れる学校もあったが、一般に尋常科の入試倍率が高く、教育熱心な家庭の子弟が多く入学した。七年制高等学校の多くが都市部にあったこともあり、校風はスマートな都会風で、旧制高校のバーバリズムとは対照的であった。7年間の系統的な教育を受けられる一方で、途中で墮落する生徒が出るリスクもあり、さらに尋常科の時からエリート意識を持つなどのマイナス面も指摘された。

台北高等学校は大正14年（1925）、つまり尋常科の生徒が高等科に上がる年に、最初の高等科入学式を行った。同年、寄宿寮「七星寮」が開設、学友会も成立し、15の部が活動を始めた。職員組織は尋常科と高等科とで一つで、校長を筆頭に教頭、教授、助教授、教諭、そして配属将校も数名いた。尋常科の教員は「教諭」、高等科の教員は「教授」と呼ばれ、学科主任とクラス担任にあたる学級主任が配置された。尋常科は各学年1クラス、高等科は各学年に文科甲類と乙類、理科甲類と乙類の4クラスがあったので、昭和2年（1927）には合計で尋常科4クラス、高等科12クラスはとなった。

旧制高校の教育課程に音楽科の授業はなかったが、7年制では尋常科があったため唱歌の授業があった。7年制の台北高等学校尋常科では音楽を専門とする教員による音楽の授業が行われ、音楽室、楽器等の配備もあった。このような環境が高等科の音楽教育、すなわち学友会音楽部の活動及び寮祭、記念祭での音楽活動の内容を発展、充実させていった。

3 同年の大正11年4月に、官立の東京高等学校、私立武蔵高等学校も七年制高校として開校している。

(3) 尋常科の学科課程

尋常科は1学年40名で、出身の内訳は、島内出身者が内地出身者を上回っていた。台湾人は昭和2年至3年の一覧のデータから考察すると、1学年に3～9人程度で、年毎に増える傾向にあった。

表1 尋常科入学者出身内訳

尋常科学年	1年	2年	3年	4年
内地人	33	32	40	37
本島人	9	5	5	3
合計	40	45	37	42

大正11年(1922)の台湾総督府高等学校規則による、尋常科の学科科目を以下に記す。

表2 尋常科の学科科目

修身、国語及び漢文、外国語(英語、独語又は仏語)、歴史、地理、数学、博物、物理及び化学、図書、唱歌、体操
外国語は英語、独語、又は仏語、随意科目として、台湾語を加える。

尋常科の学科科目の程度に関しては、台湾公立中学校規則の規定が準用された。

唱歌は第1学年と第2学年で週1時間必修であった。昭和2年至3年の一覧に、嘱託ではあるが音楽担当の教員名が載っている。一条慎三郎である。語学に台湾語が課されているのは、内地の学校の学科課程にはない特徴といえる。

(4) 高等科の学科課程

高等科は理科と文科に分かれる。さらに英語を第一外国語とする甲類、独語を第一外国語とする乙類とにクラス分けされた。出身の内訳は、内地出身者が島内を上回っていた。台湾人の割合も各クラスに3～5名程度と少ない。入試は第一試験検定と第二試験検定、無試験検定(尋常科生徒に対し)と3回行われた。第一と第二試験検定は日本内地と台湾とで行われた。

表3 高等科の学科科目

文科	修身、国語及び漢文、第一外国語、第二外国語、歴史、地理、哲学概説、心理及び論理、法制及び経済、数学、自然化学、体操
理科	修身、国語及び漢文、第一外国語、第二外国語、数学、物理、化学、植物及び動物、鉱物及び地質、心理、法制及び経済、図書、体操

(5) 学友会

大正 14 年 (1925) 6 月に高等科の学友会に 15 の部が開設される。初代会長は三沢糾校長、副会長は物理・自然科学担当の谷本清心教授であった。学友会設置の目的は、尋常科学友会では「本會ハ本校教育の主旨ヲ體シ自治以テ智ヲ磨キ徳ヲ修メ體ヲ練リ協同以テ剛正淳厚ナ風ヲ振作スルヲ目的トス」と明記され、通常会員は本校尋常科生徒、会友は本校尋常科修了生、特別会員は職員の三種類に分類されている。一方高等科は「本會ハ會員ノ心身ヲ練磨修養シ校風ヲ發揚スルヲ以テ目的トス」と明記され、通常会員は生徒、特別会員は職員の二種類に分類されている⁴。以下に創成期の様子を、『台湾総督府台北高等学校一覽昭和 2 至 3』と『台湾総督府台北高等学校一覽昭和 3 至 4』から記す。

昭和 2 年至 3 年の一覽の学友会規則によると、尋常科と高等科それぞれに以下の部があった。

表 4 尋常科

文化部	総務、雑誌、弁論、絵画、音楽、文庫
運動部	剣道、柔道、水泳、遠足、陸技競技（庭球、ホッケー、オリンピック）

表 5 高等科

文化部	弁論、文芸、園芸、絵画、音楽
運動部	庭球、柔道、剣道、弓道、ホッケー、陸上競技、水泳、野球、角力、蹴球、旅行

昭和 3 年至 4 年の一覽の学友会規則によると、尋常科と高等科それぞれに以下の部があった。

表 6 尋常科 学友会

文化部	総務、雑誌、弁論、絵画、音楽、文庫
運動部	剣道、柔道、水泳、陸技、庭球、蹴球、排籃球、ホッケー

表 7 高等科 学友会

文化部	弁論、文芸、園芸、絵画、音楽
運動部	庭球、柔道、剣道、弓道、ホッケー、陸上競技、水泳、野球、角力、蹴球、卓球、山岳

大正 15 年 (1926) に学友会雑誌『翔風』創刊、俳句会、読書会も発足した。絵画部の第 1 回展覧会、水上競技会、陸上競技会（高等農林、高等商業、医専が参加）が開かれる。昭和 2 年 (1927) に第 2 回全国高校陸上競技会に初参加、京大主催の全国高専武道大会に剣道部が出場等、台北市内及び内地の高等教育機関との交流が始まった。昭和 4 年 (1929) に新聞部が開設、

4 『台湾総督府台北高等学校一覽昭和 2 至 3』学友會規則 p.185 及び p.189

『台高新聞』が創刊となる。その後、写真部、ラグビー部、航空研究会グライダー部が創設される等、多彩で活発な校友会活動が行われていく。

3 音楽部の活動

校友会の発足時、最も活動が目立ったのは音楽部であった。当時の顧問は英語の富田義介教授で、部長と委員は共に文科甲類の学生であった。初年度の大正14年(1926)にレコードコンサートを2回開催、台日新聞社楼上で公開演奏会も開いた。音楽部はコーラス部、マンドリン部、ハーモニカ部、吹奏楽部、オーケストラ部の5つのグループで活動していたようである。昭和2年(1927)には第3回定期演奏会を台北医学専門学校の講堂を借りて行なっている(表8)。

(1) ハーモニカバンド

当時の日本ではハーモニカが普及していた。川口省吾がトンポ・バンドを結成したのが大正11年(1923)で、昭和3年(1928)には日本の内地、外地でアマチュアバンドが96あった。アマチュアバンドの先駆けは大学や旧制中学の学生バンドであったという。プロとしてはトンポ楽器製作所や日本楽器等の楽器会社専属の宣伝隊のバンド等が結成されていた。

台北高等学校のハーモニカ合奏団も、当時としては一流の域にあったようである。ハーモニカ部誕生と生い立ちに関して、卒業生が次のように思い出を語っている。

我々にとって、音楽は生活の重要な一部を占めるものであり、また、我々学生にとって、学問と音楽に対する態度は同一基盤に立つべきものである、といった真面な考え方から、台湾にも音楽研究団体が発足した。これ即ち台北高校音楽部であり、いささか面映いが、私達が組織したハーモニカバンドであったといえる。⁵

音楽を聴くばかりの活動ではなく、自分達も楽器を演奏しようということになり、素人に入りやすいハーモニカをやることになった。当時の三澤校長に理解があり、フルート、バス、コントラバス調のハーモニカを揃える許可を得、さらに日本楽器の商売抜きの尽力で楽器が揃った。ハーモニカバンド用の楽譜がなかったので、まずブラスバンドやオーケストラ用の楽譜を手に入れ、それらを部員がハーモニカ用にアレンジした。一作目は「クラシカポスト」であった。オーケストラでヴィオラを弾いていたある部員は、音楽部委員最後の年にウェーバーの「舞踏会への招待」をハーモニカ合奏用にアレンジして、ハーモニカバンドを指揮したがうまくいかず、他の部員に注意されて編曲をやりなおしたと、回想している。

5 『台北高等学校：1922年－1946年』p.173

部員達は個人奏者としては名手であり、各自自信もあったが、合奏は皆未経験でなかなかうまくいかなかった。そこで住吉平太郎をコーチとして迎えた。彼は台北市音楽隊のクラリネット奏者であり、活動写真館「新世界」のバンドリーダーでもあった。机を叩いてテンポをとりながら、一人一人を熱心に親切に指導したという。

(2) マンドリン

大正 15 年 (1926) に高等科に合格した卒業生の回想によると、入学時には音楽部にはハーモニカバンドとマンドリン合奏しかなかった。当時の音楽部には特にマンドリン系の楽器に名奏者がいて、台北市の音楽愛好者を魅了していた。音楽部マンドリングループは、台北市大和町の商店街のある店の 2 階に集まり、練習をした。メンバーはマンドリン、マンドラ、ギターを担当し、シュトラウスの「芸術家の生涯」やマチャョッキの「麦まつり」などを奏でた。この練習成果は昭和 2 年 (1927) に盛大に開催された第二回の音楽会で披露された⁶。

(3) ブラスバンド

昭和 2 年 (1927) に尋常科に管楽器、大太鼓、小太鼓などが揃えられた。当時の音楽嘱託教員で、台北第一師範学校の一条慎三郎が指導を始め、ブラスバンドの練習が始まった。昭和 3 年 (1928) に尋常科の唱歌主任として村瀬靖彦講師が赴任したのを契機に、尋常科生徒を主体としたブラスバンドが充実し、同時にヴァイオリンを演奏する者も増えていった。

昭和 4 年 4 月に校歌が誕生し、音楽部が演奏してレコードに吹き込んだ。この時の演奏メンバーは合唱 8 名と、コルネット 2 名、クラリネット 2 名、アルト 3 名、テナーホルン、トロンボーン、バリトン、バス各 1 名からなるブラスバンドで、指揮は村瀬靖彦講師であった。同年 8 月に第 1 回台湾、フィリピン交歓水上競技会が举行され、ここでもブラスバンドが応援で活躍した。演奏された曲目は以下の通りである。

入場式：“Down Main Street March”

フィリピン国旗掲揚：“The Star-spangled Banner” 及び “Philippine National Songs”

間奏：“Entry of Gladiator”

(4) オーケストラと弦楽四重奏

昭和 3 年 (1928) 頃から、高等科の弦楽に尋常科のブラスバンドが加わり、村瀬靖彦講師の指導のもとオーケストラの練習が始まった。メンバーは第 1 ヴァイオリン 3 名、第 2 ヴァイオリン 3 名、ヴィオラ 1 名、チェロ 2 名、コルネットとアルト各 2 名、フルート、クラリネット、バリトン、トロンボーン、バス、ピアノ各 1 名であった。この年の第 4 回演奏会では、ビゼー

⁶ 演目は不明

の「アルルの女」、ワグナーの「タンホイザー」が合唱付きで、シューベルトの弦楽四重奏等が披露された。昭和4年（1929）に行われた秋の第5回演奏会では、オーケストラによる演目も登場する。この演奏会は落成したばかりの講堂で行われた。プログラムは表9に示す。

昭和3年に村瀬靖彦講師を第1ヴァイオリンとする弦楽四重奏団「MUAMIE 四重奏団」が結成された。これはメンバーの頭文字をとり命名されたグループで、第1ヴァイオリン村瀬靖彦講師、第2ヴァイオリンは1年理科甲類の秋山勇雄、ヴィオラは数学の嶺脇四郎教授、チェロは3年理科甲類の江上一郎であった。秋山勇雄は結成時の様子を次のように記している。尋常科から一緒だった江上一郎と音楽部の委員になり、西洋音楽史や解説書等を読みふけり、いろいろな楽器を集めて勉強していたが、村瀬講師が着任して間もなく、正式に弦楽四重奏団を結成することとなった。毎週土曜の夜に江上氏の家に集まって練習をした。「当時としては初めてのことであり、我々は最高楽団にでもの上り上がったような感じをもったものである」と回想している⁷。

（5）音楽部の指導者

揺籃期の音楽部の指導にあった教員達の顔ぶれは実に多彩であり、音楽部の礎を築いた功績は大きい。発足時の顧問は英語の富田義介教授で、その後は志賀孝平教授、嶺脇四郎教授と引き継がれていく。志賀孝平教授は高等科では物理・力学を担当し、尋常科の英語教諭を兼任していた。嶺脇四郎教授は数学担当で、いずれも音楽の専門家ではないが、音楽に造詣の深い先生による熱心な指導が行われたようである。正式な着任時は不明だが、発足3年目には一条慎三郎が嘱託として唱歌の授業を担当していたので、音楽部も指導を受けていた。音楽専門家による指導が始まったのである。翌年には村瀬靖彦が尋常科の唱歌主任として着任、音楽部の発展に多大な貢献をした。音楽専門家ではない教授達がいずれも理科系の専門家であったことは特筆することである。

『台湾総督府台北高等学校一覧』によると、昭和3年から同5年までは村瀬靖彦講師が唱歌だけでなく、英語も兼任となっている。昭和8年に唱歌の学科主任には大西安世講師が着任し、翌年より科目名は唱歌から音楽へと変わっている。明治41年（1908）に東京音楽学校本科器楽部を卒業した大西講師は第7回の記念祭の音楽会でピアノの独奏をしている。

4 記念祭

教養教育理念と寮制を特徴とした旧制高校において、記念祭等の学校行事は重要であった。記念祭では学生達は音楽、美術、演劇、運動と多彩な能力を発揮し、またクラス単位の出し物

7 江上一郎「音楽部 初期のころ」『台北高等学校：1922年－1946年』p.176

もあったので、クラスの結束や対抗意識を通して、友情を育てていった。昭和3年より毎年記念祭と寮祭が行われた。記念祭では、音楽会、映画界、展覧会の他、教室を飾り付けてクラス毎に競いあった。寮祭では寮を飾り付け、寮祭歌が発表された。これらは一般市民にも公開された。

第1回記念祭は、昭和3年（1928）1月15日から、御大典奉祝を兼ねて盛大に行われた。中でも演劇は各クラスが秘密に思いを凝らして出し物を決め、毎年恒例となった。菊池寛「順番」、有島武郎「ども又の死」、ロマン・ローラン「群狼」、チェホフ「街道」、ゴルキー「どん底」等、日本や海外の作品の公演を行なった。演劇は人気の呼び物であり、毎年台北市民から熱望されていた公演であったが、昭和12年（1937）を最後に中止となった。

記念祭の最後を飾る大運動会では、各クラスの仮装行列があった。第1回では尋常科の生徒による「生蕃踊り」が披露され人気を博した。「生蕃踊り」は後に「高砂踊り」として記念祭運動会の呼び物の一つとなる。

音楽会も毎回開かれたが、曲目の記録は全て残っていない。昭和9年の第7回記念祭と翌年の第8回記念祭の音楽会の曲目は以下の通りである。

第7回記念祭

七重奏

ベートーヴェン 「ロンディーノ」

モーツアルト 「ディベルティメント」

ベートーヴェン 交響楽「第二シンフォニー」

ピアノ独奏 大西安世

第8回記念祭

(1) 吹奏楽：指揮 大西安世

マスカーニ 歌劇「カバレリア・ルスチカナ」より

(2) ハーモニカ合奏

ミーチャム 「アメリカンパトロール」

ビゼー 「カルメン」より

(3) 三重奏

ベートーヴェン 「セレナーデ」二長調

ヴァイオリン 山本正水、ヴィオラ 嶺脇四郎、チェロ 高坂知武

(4) メンデルスゾーン「イタリー交響曲」第二楽章 指揮 嶺脇四郎

(5) モーツアルト フルート協奏曲二長調

フルート 岡垣新三郎 指揮 江上辰郎

(6) ベートーヴェン「ピアノ協奏曲ハ長調」

ピアノ 嶺脇淑子、指揮 嶺脇四郎

5 「七星寮」と寮祭

台北高等学校の寮名は「七星寮」で、高等科開設とほぼ同時期に創立された。全寮制ではなかったが、台湾各地及び内地出身の寮生約 100 名が自治生活を送った。日本人生徒と台湾人生徒が共同して学寮生活を営んだことは、台北高等学校の大きな特徴と言える。特に、遠く内地から南国の地台湾に夢を抱いてやってきた内地出身者と、島内の中学の出身者と、尋常科から入寮した者とが、互いにある時は嫌悪感を感じながら、ある時は憧れを持ちながら同化していった。しかし新設の高等学校の有様は、当時の台北市民にとっては異様であった。将来は学士様になる道が保証されている高校生達のバンカラな態度は、台北の市民には理解し難く、寮生は台北の異観として当初から新聞で叩かれた。寮生活の名物であるストームで近隣に迷惑をかけたり、寮の食事に対する不満から抗議行動をおこすなど、様々な問題も発生した。しかし、コンパ、風呂場での寮歌の大合唱、レコードによる音楽鑑賞、名士の講演会、土曜の夕方に学校のグラウンドでサッカーのボールを蹴り合うなど、寮生の生活は自由で文化的であった。

寮祭は寮生にとって最大の年中行事であり、七星寮でも昭和 3 年（1928）に第 1 回記念祭とともに寮祭が開催された。台北でこのような催し物は初めてであり、寮生達はポスターやピラによる宣伝を大掛かりに行った。当日は寮生が出した模擬店のお汁粉、おはぎ、お寿司が売り切れという盛況であり、尋常科の寮と合同で行った頓智や風刺を施した寮の装飾は、一般市民を驚かせた。一般市民の投票による等級決めが行われ、当選した寮には賞金が出るというコンペティションも行われた。

昭和 4 年（1929）に新寮が完成した。木造建築の旧寮とは異なりコンクリートの近代建築で、これは内地の学寮に比べても立派な建物であり、入寮希望者も増えた。10 月に行われた落成記念祝賀会を機に「新七星寮歌」の募集が行われ、高島良雄の「南方文化を背負いつつ」が発表された。寮には総務、庶務、文芸、衛生、運動、娯楽、炊事の役員がいて、運営を行っていた。昭和 9 年（1934）の第 7 回記念祭で、食堂経営で収益をあげた時は、衛生部は薬品棚を整備し、娯楽部は蓄音機の電化を行い、さらにレコードの戸棚を購入したという記録もある。

終戦後、日本人学生は寮委員を辞退し、台湾出身の中国人学生によって運営された。しかし昭和 20 年（1945）の 10 月に台北高等学校が中国政府に接收されると、日本人学生の引揚げが始まる。寮送別大会が日本人、中国人学生とで盛大に催され、七星寮は事実上の解散に向かった。

6 寮歌、寮祭歌及び記念祭歌

旧制高校の青春と寮歌は切っても切り離せないものであるが、特に寮生にとって寮歌は特別なものであった。昭和 18 年（1943）の七星寮の庶務委員だった寮生は、「戦時下の寮生活に

明るさを保ち、自由と自治の伝統を守るための努力をしたが、その一つが寮歌の練習であった」と回想している。毎日夕方になると、寮庭に寮生達は集まり青春を謳歌し、寮精神を鼓吹した。

七星寮の寮歌を覚えると、北は北大から南は七高に至るまで優愛な歌を全て呶鳴った。寮庭に先輩が植えた七本の椰子の木は既に五～六年にも伸びていたが、ここで心ゆくまで台高踊りを乱舞した事は勿論である。汗をしばり出した後風呂にざんぶり飛び込み、咽のかれるまでまた歌った。⁸

台北高等学校の寮歌第1号は昭和2年(1927)の七星寮寮歌「陽炎燃ゆる」である。近代建築の新寮に移った昭和4年(1929)に、新七星寮歌「南方文化」が発表された。翌年の第3回の寮祭がストで中止になったため、寮祭毎に発表されるようになったのは第4回、昭和6年(1931)からである。放送局から寮歌が放送される機会もあった。昭和6年の寮祭前夜に、台北放送局から学校の歌を放送することになり、「台高踊り」を寮生で受け持ち歌った。その他に校歌、野球部歌、水泳部歌が、音楽部の梁炳元の指揮と古室敬義の伴奏で紹介されている。また昭和14年(1939)の寮祭の時も、台北放送局から寮歌が放送された。

昭和15年(1940)には「台北高校歌集」が、七星寮から発行される。『台北高等学校歌集』(1982)によると、昭和2年(1927)から昭和17年(1942)までに寮歌、寮祭歌、記念祭歌は14曲発表されている(表10)。歌詞の内容は外地、島、南国を意識した叙情的な傾向である。曲は総じて四七抜き長音階又は四七抜き短音階で、リズムはピョンコ節のいわゆる寮歌調である。しかし、例えば村橋靖彦や大西安世等の音楽講師であった専門家による曲は、寮歌調ではあるが西洋楽曲的な形式の統一感があり、また記譜も曲想の指示、強弱記号等詳細で、専門的になっている。

新七星寮歌「南方文化」

新寮の完成時に新寮歌の募集が文芸委員により企画されたが関心が薄く、一度は流れてしまった。しかし卒業までに間に合わせたいと強い希望を持った文科乙組の高島良雄が着手し、唱歌の村橋靖彦講師に作曲を依頼した。期日までの限られた時間で曲をつけた村橋講師は発表の日に寝不足の目をしばたたきながら、数十名の寮生を集めて歌唱指導を行ったという。

作詞者の高島良雄は「常夏の国への賛歌を歌いあげようとした」、と述べている。また当時流行した郷土色豊かな「〇〇行進曲」「××小唄」などの影響で、台北放送局から流されていた新しい台湾民謡から影響を受けたこと、そしてこの時期は大正デモクラシーに至る思想の転換期でもあり、「古典的定型的寮歌の臭みを離れ、新時代に即応し、歌い易い歳時記風にア

8「七星寮後記」『台北高等学校：1922年－1946年』p.410

レンジした」と作詞への想いを述べている⁹。当時台北帝国大学では、台湾のもつ特殊性に注目し、南洋史学科や熱帯医学の研究などに貢献していた。このような傾向が「南方文化」という言葉に象徴されたと思われる。

7 校歌

台北高等学校の代表歌といえば、第一校歌の「獅子頭山」（譜例参照）と第二校歌の「みんなみの島」であろう。第一校歌は三沢糾校長が作詞をし、阿保寛が作曲、第二校歌はドイツ語の西田正一教授が作詞をし、山田耕筰が曲をつけたものである。昭和4年（1929）に村橋靖彦講師の指揮で音楽部が演奏し、レコードに吹き込んでいる。

第一校歌「獅子頭山」の歌詞は七五調である（譜例参照）。内容は第一節が「理想を胸に秘めつつ」と理想を、第二節は「文の林に分け入りて」と学問を、第三節で「錬武の場に下りたちて」と心身の鍛錬を、第四節で「いざ手をととりて歌はなむ、青春の日はくれやすく」と青春を賛歌している。作詞をした三沢糾校長は自由主義の教育者で、昭和2年（1927）の生徒監排斥事件では官制に抗って「生徒監廃止」の英断を下した人物である。

曲はへ長調 4/4 拍子で Moderato の指示があり、第七音（導音）が経過的に一回だけ現れる四七抜きならぬ、七抜き音階である。リズムは付点によるピョンコ節で、4小節単位の全12小節からなる aba' 形式である。作曲の阿保寛は大正6年（1917）に東京音楽学校の甲種師範科を卒業した音楽教育家である。旧制武雄中学校の校歌の作曲者でもあり、また『音楽教育研究』1940年の7月号に教材研究の教授法で名を連ねている。

第二校歌「みんなみの島」の歌詞も七五調である。内容は第四節までは「赤道圏下」、「椰子の葉」、「七星山」、「淡水畔」と台湾の自然を背景に若さを謳歌している。しかし最終節では、西洋式の教育うけ、学問を探求しながらも、東洋人としての使命を喚起し、新たな文化の創造の為に勉強せよと説いている。

「みんなみの島」第五節

文化を誇りし西歐に、わが東洋に清新の、使命は重し孜々として
今や榮華の日は落ちて、文化のあしたあけんとす、他日雄飛の準備せん

曲は変口長調 4/4 拍子で、「莊嚴に」との指示がある。第七音（導音）が一回も現れない音階構造である。4小節単位の全16小節で、最初の4小節には第四音が出てくるが、残りの12小節は四七抜き長音階となっている。リズムも前半はピョンコ節調だが、後半はシンコーペーション

9 高島良雄「新七星寮歌の生まれるまで」前掲書 p.412

ンやアウフタクトの複雑な構造で、形式は abcc' である。ある卒業生は、第一校歌は良いが第二校歌は「どうも歌いにくい」という感想を述べている。

8 部歌

『台北高等学校歌集』（1982）には、部歌は 11 曲掲載されている。作曲年は不明であるが、一覧を表 11 に示す。歌詞は椰子、南国等の言葉が頻出する叙景的な印象である。作曲を赤尾寅吉や村橋靖彦等の音楽専門家に依頼しているのが目立つ。赤尾寅吉は台北高等学校の教員ではないが、岡山県女子師範、鹿児島県師範を経て、台北第三高等女学校嘱託をしており、同校の校歌も作曲している音楽教育家である。台湾の公学校唱歌科教材調査の委員に選任されたり、台湾州の民謡を作曲しレコード録音をする等の活躍をしていた。

9 高砂踊りと台高踊り

旧制高校の寮歌や応援歌の中には、踊り付きの名物歌があるが、台北高等学校には高砂踊りと台高踊りの二曲がある。高砂踊りは尋常科の生徒のために、台高踊りは高等科の生徒のために作られた。高砂踊りは昭和 3 年（1927）の第 1 回記念祭の大運動会で尋常科の生徒によって「生蕃踊り」の名で披露された。体育の船曳実雄教諭と音楽の村橋靖彦講師による合作である。高砂踊り誕生には、台北高等学校ができたての新しい学校だったので、生徒の気持ちを統一するために何かが必要と、三沢校長が特別に留意していたという背景があった。船曳教諭は休みを利用して台湾の高山を踏破する中で、蕃社の尊長と語り、蕃童と遊ぶ等、原住民と触れ合ってきた。電気もなく手織りの布をまとう粗末な生活ではあるが、彼らが以心伝心の朗らかな生活を楽しんでいること、そしてこの生活を支えているのが、歌と踊りであることに感銘を受けていた。タイヤル族の人達が 500 人以上も集まって、焚き火を囲み、心の中にあるものを一步一步踊りつつ表現する姿にうたれ、これが高砂踊りのモチーフとなったという。男子生徒達の気持ちを満足させるために、自由奔放な踊りを村橋講師と考えたと、由来が記されている。

高砂踊りは、高砂族各蕃社の「平素の踊り」、「狩りの踊り」、「粟祭りの踊り」からヒントを得て構成されている。原始的な純情に立ち返っても統制をとりつつ踊ることは人間生活に必要なであるという考えから、自由奔放の中にも秩序があり時間通りに終わる。音は楽譜に記されていないが、振り付けは生徒の努力によって図解が残されている。（図解参照）

蕃歌その 1 アロー ワンナイ ナーヤーラー オーウィヤー
ピーノーデーヤン ゲーターヤン …以下省略（筆者による）

蕃歌その2 エーイ エーイ エイヤハイヤ ハイヤーハ アイエー
エーヤーハイ ヤア ハア アア アイ ハイヤー ハイエー
ハイヤーハイエーヤ ハア アア アイ

台高踊りは、昭和4年（1929）の記念祭の運動会で発表された。小山捨月教授が作詞をし、村橋靖彦講師が曲をつけている。記念祭の運動会の総務委員となった学生が、運動会を特色あるものにしようと小山教授に相談したところ、名物踊りを作ってはどうかという話が持ち上がり、まず歌詞ができあがった。その後村橋講師に作曲を依頼したところ、曲は一日ならずして出来上がり、振り付けも考えてられていた。これに体育の船曳実雄教諭と陸軍歩兵少尉の鴻沢吾老助教授が協力して完成した。

台高踊りも毎年の記念祭運動会に継承され、台北高等学校の名物となった。戦後の全国寮歌祭でも同窓生によって踊り継がれた。発表時と昭和8年（1933）以降のものとはかなり異なってしまったようだが、原型は同じである。曲は音程が跳躍したり、語尾を伸ばしたり、アクセントがあったりと蕃族調である。各節の最後に「ホーライ、ホーライ、ホーライ、ホーライ、臺高にとこなつの」と繰り返される。（図解参照）

11 その他

『台北高等学校歌集』（1982）には作詞、作曲者の記載がない「基隆埠頭『別れの歌』」、「ストーム歌『桃太郎』」の他に4曲掲載されている（表12）。中でも「観月舟行之歌」は大正15年という台北高等学校高等科開設2年目に作られ歌である。英語担当の小山捨月教授が作詞し、唱歌の村橋靖彦講師が作曲しており、「台高踊り」と同じコンビである。観月舟行は毎年9月に新店溪から川下りをしながらお月見をする学校行事である。曲は3拍子で「ワルツの調子にて」と曲想が書かれているが、舟歌風のゆったりとした3拍子である。「心の美酒酌まむかな」という歌詞で始まるが、未成年者が飲酒したとして検挙されたこともあった。

「基隆埠頭『別れの歌』」は台北高等学校の青春のフィナーレとなった内地渡航の旅立ちの際に歌われた。神戸港まで約5日かかった船旅である。基隆港の埠頭で、送る者は棧橋で応援旗を振り、送られる者は甲板に立ち、「白線片手に、皆さらば…」と希望と哀愁をおりませた心情が歌われた。

12 音楽教育と音楽活動に貢献した人物

台北高等学校の音楽活動は多くの人々に支えられていたが、ここでは学内での指導、演奏、

そして校歌、寮歌の作曲に尽力した人物のプロフィールを紹介する。

一条慎三郎（明治3年－昭和20年：1870-1945）

昭和3年頃まで、嘱託で音楽の担当をしていた一条慎三郎は、台北第一師範学校¹⁰で音楽を教えていた。台湾初の唱歌教科書である『公学校唱歌集』は彼の編集によるものである。台北市民歌、台湾警察歌、「なわとび」や「台湾風景」等の台湾の唱歌、そして台北第二中学校の校歌等作曲している。明治22年（1889）に東京音楽学校を退学したが、その後、検定で教員免許を取得している。国内の師範学校や高等女学校で教鞭をとり、山形師範学校に在職中に伊沢修二に台湾に行くことを勧められたようである。明治44年（1911）に台湾に出向を命ぜられ、昭和20年に台北で亡くなるまで、台湾の音楽教育に尽力した。

村橋靖彦（？－昭和19年：？－1944）

尋常科の唱歌兼英語の講師をしていた村橋靖彦に関する記録は少ない。公的な資料としては国立台湾師範大学の「臺北高等学校資料室」の展示資料のみであるが、以下に抜粋する。

村橋靖彦は萩出身でコロンビア大学を卒業している。大正14（1925）年から台北高等学校で英語と音楽を教え、ヴァイオリニストとしても活躍した。昭和14年（1939）に帰国し、京都の華頂女学校や技芸学校で音楽を教え、昭和17年（1942）に通訳としてビルマに赴任、昭和19年にモルネンにて陸軍中佐として戦病死した。遺族によると現地に音楽を教えたいと、従軍したという。昭和4年（1929）に尋常科に入学した生徒は、村橋先生に“*One Hundred and One Songs*”なる英語のポピュラーソングを習い、今でも口ずさみ得ると述べている。村橋講師の着任でブラスバンドやオーケストラが発展したということからも、アメリカ留学の経歴を生かして、東京音楽学校や師範学校出身の音楽教育家とは異なる教育をしていたと思われる。

高坂知武（明治34年－平成9年：1901-1997）

昭和10年（1935）の第8回記念祭音楽会において、ベートーヴェンの「セレナーデ」二長調の弦楽三重奏でチェロを演奏している高坂知武は、台湾の学生オーケストラの発展に貢献した人物である。明治34年（1901）に山形県鶴岡に生まれ、旧制第七高等学校を経て、九州帝国大学で農学を修めた。彼は旧制第七高等学校大正八年西寮寮歌「19世紀の文明の」の作曲者でもある。昭和5年（1930）より、台北帝国大学生物産業機械工学科の助教授として農業の機械化をテーマに教育と研究に従事した。一方で、昭和9年（1934）より台北帝国大学学友会音楽部の顧問となり、翌年には台北帝国大学オーケストラの指揮者となった。戦後も台湾に留まり、国立台湾大学で教育と研究を続けながら、吹奏楽部やオーケストラ部の設立に尽力し、

¹⁰ 明治29年（1896）設立の国語学校が大正7年（1918）に台北師範学校、昭和2年（1927）に台北第一師範学校へと変遷した。

士林弦楽奏団の指揮もつとめた。昭和48年(1973)に退職後は日本に帰国し、平成9年(1997)に千葉で亡くなっている。

国立台湾大学の校史館には、彼が使用したチェロが展示されているが、これは台湾で製作された最も古い楽器の一つである。高坂知武は台湾での弦楽器製作を促した軌跡も残している。このように学外での音楽活動にも尽力し、「台湾農業の三大恩人の一人」と評価される一方で、台湾における西洋音楽の受容と普及にも多大なる貢献を果たした。

考察

本稿では台北高等学校の教育と音楽を、七年制高等学校、校友会音楽部の活動、記念祭や寮祭といった学校行事と音楽、音楽活動の発展の重鎮となった人物という観点で考察を進めてきた。この結果、以下の特徴が導き出された。

① 尋常科の存在が、高等科の音楽活動をより豊かなものにした。

ハーモニカやマンドリンから始まった音楽部の合奏は、尋常科の音楽教師の尽力でブラスバンド、オーケストラへと発展していった。尋常科のブラスバンドを基盤に高等科でオーケストラが組織され、音楽部の部員には尋常科の出身者が多かった。

② 音楽活動に関わった学生や教員の専門は多様であった。

音楽部では音楽専門の教員と理科系専門の教員が顧問となり、指導にあたっていた。また音楽部の部員には理科の学生が多かった。音楽会では高等科の数学の教授がヴィオラを弾いたり、指揮をしたり、台北帝国大学の生物産業機械工学科の助教授がチェロで参加したりと多彩なメンバーで演奏が行われていた。

③ 各自の音楽活動も幅広いものであった。

音楽部にはコーラス部、マンドリン部、ハーモニカ部、吹奏楽部、オーケストラ部とあったが、一人二役、三役と兼務しないとたたない事情があった。例えば「MUAMIE 四重奏団」のチェロ奏者の江上一郎は、校歌の録音時にはコーラス部のメンバーとして参加している。教員も、寮歌の作曲をしたり、踊りの振り付けをしたり、ヴァイオリンを弾いたり、唱歌の指導をしたりと、多様な音楽活動と幅広い指導をしていた。

④ 音楽活動は台北市民に開かれ、支えられていた。

当時の台北市の音楽事情は西洋音楽の受容と普及という点では、揺籃期であった。例えば宗教音楽では大井淳二が日本聖公会、日本基督教会を中心に合唱団を組織し、「ハレルヤコーラス」等を紹介していた。ラジオ放送は試験的な時代であり、一流音楽家の来演も少なかったので、レコードで鑑賞をした。レコードは日本のものはニッポノホンであったが、コロムビアやポリドールやその他の舶来盤に名曲ものは頼っているという状況であった。台北には日本楽器の出張所があったが、オイレンブルグやフィルハーモニア版など専門的なものは内地へ注文

しなければならなかった。台北市には民間の音楽教室はたった一つしかなく、そこでは山本麟三という音楽教師がヴァイオリンやマンドリン等の弦楽器の教授に熱意を傾けていた。音楽部の部員の中には、この教室に通ったものもいた。

このような状況の中で、台北高等学校の学生による音楽会、寮祭や記念祭での様々な文化的催しものは、おそらく台北市民にとっては良き娯楽であり、また気軽に文化に触れる機会であったと思われる。音楽部の部員達が演奏会の練習を学内に留まらず市内の居宅や商店などで行っていたという回想もある。校歌を録音してレコードにしたり、寮歌をラジオ放送で流したり等、学生達の音楽活動は当時の台北市の市民に支えられていた。このようなことから、市民が台北高等学校の学生や教員による演奏を、楽しみにしていたと推測できる。

⑤ 他の高等教育機関との交流があった。

一条慎三郎や赤尾寅吉のように師範学校の音楽教師が、指導や寮歌、部歌の作曲に関わった。また上述した高坂智武助教授のように、台北帝国大学の教官も演奏に加わる等、他の高等教育機関との交流があった。

⑥ 西洋音楽と原住民の音楽文化の受容が行われた。

音楽会の演目や音楽部の活動を見ても、中国の音楽や日本の伝統音楽との関わりは見られず、西洋音楽の受容と普及に熱心であったと思われる。一方で、高砂踊りや台高踊りの発案とその人気ぶり等、原住民とは文化的な交流があり、教員と学生が受容と普及に熱心だったことがわかる。山岳部のある部員は、山の中でタイヤル族の娘達の悲恋の歌を聞き、その物悲しい歌に魅せられたと回想している。学生生活の中に、自然と原住民の文化に触れる機会があったと思われる。

おわりに

台北高等学校の教育とそこで繰り広げられた音楽活動が実に多様で多文化的であったことが理解できた。台湾人の学生は数こそ少なかったが、差別を受けたり、日本人の学生と対立するようなことはなかったという。今日、日本の高等教育界では教養教育の在り方が問い直され、グローバル化の進む21世紀における多文化共生、多民族共生に対応する知識、知性、教養の向上が求められている。本稿では今から90年前の外地台湾で、多文化共生を目指した教養教育が行われていたことが、「学生の音楽活動」を通して見えたといえよう。

最後に台北高等学校の学生にとって「歌う」ということが如何に大切であったか。戦時下の学生の言葉を引用する。

大東亜戦争の重苦しい空気は次第に濃さをまして来つつあった。そんな時代の流れの中で、歌はわれわれの唯一の救いであった。莓に渴をいやしながら登った獅子頭山上

で歌った校歌、雪見に登った大屯山頂の台高踊り、その帰り北投のいでゆにひたりながら歌った寮歌、烏来の蕃社を訪れて新店溪の吊橋で歌った記念祭歌、雨にけぶる基隆の埠頭で歌った別離の歌…その一つ一つが私の青春の思い出に刻みつけられている。¹¹

(本学准教授＝音楽教育学担当)

参考文献

- 岡部芳広「植民地台湾における公学校唱歌教育の研究」博士論文 神戸大学 2004
- 尾高暁子「両大戦間期の中日ハーモニカ界にみる大衆音楽の位置づけ」www.lib.geidai.ac.jp/MBULL/33Odaka.pdf
- 下道郁子「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽活動」東京音楽大学研究紀要第31集 2007 pp.33-52
- 下道郁子「明治20年代～40年代の旧制高等学校の音楽教育―特に第一高等学校の音楽活動を中心―」音楽教育史研究第11号 2009 pp.39-51
- 下道郁子「大正時代の第一高等学校の寮歌の研究―旧制高校の教育と音楽的側面からの検討―」東京音楽大学研究紀要 第33集 2009 pp.23-41
- 「七大学をめぐる歌―紅もゆる・前編」『U7』vol.39 2011 8月号 社団法人学士会刊
- 『自治と自由の鐘が鳴る：獅子頭山讃歌：旧制臺北高等學校創立80周年記念文集』2003 旧制臺北高等學校記念文集刊行委員会
- 高橋佐門『旧制高等学校研究 寮歌・校風論篇』1979 昭和出版
- 『台北高等学校：1922年－1946年』1970 蕉葉会
- 『台北高等学校歌集 創立60周年記念』1982 蕉葉会
- 『台湾総督府台北高等学校一覧 昭和2至3年－昭和4至5年、昭和5年度、昭和8年度－昭和10年度』昭和3－10 台湾総督府台北高等学校編
- 『寮歌は生きている』1966 旧制高校寮歌保存会
- その他参考資料
- nakano bunko <http://www.geocities.jp/nakanolib/>
- 国立台湾師範大学「臺北高等学校資料室」の展示資料『校史館』（展示室パンフレット）2008 国立台湾大学

11 蜂谷宣朗「曲のない寮祭歌」前掲書 p.319

表8 第3回演奏会 昭和2年10月15日 台北医学専門学校於て

第1部	第2部
1 ハーモニカ合奏	1 ハーモニカ合奏
a コスタ アフランゲサ	ローザス 波濤をこえて
b シューベルト ミリタリーマーチ	2 マンドリン合奏
2 マンドリン合奏	ボッタキャリ 岸辺にたちて
マチョッキ 麦まつり	3 男声三重唱
3 ハーモニカ合奏	a 小川一郎 峠をこえて
ズッペ 軽騎兵	b 弘田竜太郎 おぼろ月夜
4 ヴァイオリン二重奏	4 ピアノ独奏
プレイエル ソナチネ Op. 48	a ブラームス ワルツ Op.39
	b パデレウスキ ミヌエツト Op.14
	5 ハーモニカ合奏
	ズッペ 詩人と農夫

表9 秋の第5回演奏会

第1部	第2部
1 管弦楽	5 ベートーヴェン 七重奏・作品20番
(イ) サンサーンス	6 ドボルジャック
歌劇「サムソンとデリラ」デリラの歌	ヴァイオリン・ピアノ合奏
(ロ) ルービンシュタイン ローマンス	ソナチネ作品100番
(ハ) クレマン 小夜楽	7 管弦楽
2 合唱	(イ) ルービンシュタイン 天使の夢
(イ) ジルヘル 兵士	(ロ) アレン 東洋の乙女
(ロ) ウエルネル 牧場の薔薇	
(ハ) モーツァルト グローリア	
3 マンドリン合奏	
(イ) サルヴェッチ 月への詞	
(ロ) マチョッキ マドリッドの黄昏	
4 ハーモニカ合奏	
シュトラウス「うるわしきチューブ」	

表 10 寮歌、寮祭歌及び記念祭歌

年	歌名	通称	作詞	作曲
昭和 2 年	七星寮寮歌	陽炎燃ゆる	秋永肇	三木政輔
昭和 4 年	新七星寮寮歌	南方文化	高島良雄	村橋靖彦
昭和 6 年	第四回寮祭歌	旅の子	藤田福平	鈴木茂雄
昭和 7 年	第五回寮祭歌	春月譜	新垣宏一	松原宏
昭和 8 年	第六回寮祭歌	七星が嶺に霧ははれ	小山捨月	大西安世
昭和 9 年	第七回寮祭歌	旅愁	原田敏夫	江上辰郎
昭和 10 年	第八回寮祭歌	惜春宵之賦	芝百郎	未作曲
昭和 11 年	第九回寮祭歌	中天の想い	保島国彦	山口房雄
昭和 11 年	第九回記念祭歌	亜細亜の空の曙に	佐藤忠嗣	大西安世
昭和 12 年	第十回記念祭歌	新潮南にウネリして	坂井一彦	山口房雄
昭和 14 年	第十二回寮祭歌	時代の波は	伊藤醇	庄司健三
昭和 15 年	第十三回寮祭歌	乱雲低く	藤森秀雄	大西安世
昭和 15 年	第十三回記念祭歌	鵬程万里	藤原登喜夫	蘇銀河
昭和 17 年	第十五回記念祭歌	七星ヶ嶺に	池間昌男	内藤良

表 11 部歌、応援歌

歌名	作詞	作曲	歌名	作詞	作曲
剣道部部歌	佐藤利広	赤尾寅吉	水泳部部歌	小山捨月	村橋靖彦
柔道部部歌	岩崎彰一郎	渡辺初雄	水泳部部歌	松村一雄	村橋靖彦
野球部部歌	永田靖	花井貞雄(曲第一)	庭球部部歌	山村光敏	村橋靖彦
		村橋靖彦(曲第二)	山岳部部歌	佐藤健児	赤尾寅吉
陸技部部歌	小花三郎	藤岡保夫	野球部応援歌	川島悌三郎	赤尾寅吉
水泳部部歌	三澤糾	赤尾寅吉			

表 12 その他

歌名	作詞	作曲	歌名	作詞	作曲
観月舟行之歌	小山捨月	村橋靖彦	別離の歌	豊見山昌一	伴元俊
凱旋歌	川島悌三郎	赤尾寅吉	晨明	田中広智	大西安世



オーケストラ
 (『台北高等学校：1922年－1946年』より)



尋常科の生徒たち
 (「臺北高等学校資料室」の展示資料より)



尋常科の高砂踊り
 (『台北高等学校：1922年－1946年』より)



台湾師範大学に継承された講堂 (筆者撮影)



国立台湾師範大学「臺北高等学校資料室」(筆者撮影)

第一校歌「獅子頭山」

阿保 寛 作曲

Moderato

ししとうざんに く もみだれ しちせいがねに
 きりまよう あさな ゆうなに あまかける
 おもいをむねにひ め つつも こまのあがきの
 た ゆみなく わざにいそしむま な びのや

『台北高等学校歌集』より

高砂踊り図解

名称	① 山跳び (二回)	② 狩り(その一) (一回)	③ 狩り(その二) (一回)	④ 狩り(その三) (一回)	⑤ 狩り(その四) (一回)	⑥ 狩り(その五) (一回)	⑦ 狩り(その六) (一回)	⑧ 狩り(その七) (一回)	⑨ 狩り(その八) (一回)	⑩ 狩り(その九) (一回)	⑪ 狩り(その十) (一回)	⑫ 狩り(その十一) (一回)	⑬ 狩り(その十二) (一回)	⑭ 狩り(その十三) (一回)	⑮ 狩り(その十四) (一回)	⑯ 狩り(その十五) (一回)	⑰ 狩り(その十六) (一回)	⑱ 狩り(その十七) (一回)	⑲ 狩り(その十八) (一回)	⑳ 狩り(その十九) (一回)	㉑ 狩り(その二十) (一回)
型	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4
回数	自然行進	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲
要領	動作はすべて左足より	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る	左足をあげ飛び上る
伴奏曲	伴奏なし	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲	御大典の曲

台高踊り図解

踊り型	1 ①	2 ①	3 ①	4 ①	5 ①	6 ①	7 ①	8 ①	9 ①	10 ①	11 ①	12 ①	13 ①	14 ①	15 ①	
歌	用意	タラ	ラッタ	タア	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	タラッタ	
要領	進行方向に向き手を腰	1 右足を右足踵につける	2 左足を左足踵につける	3 右足を右足踵につける	4 左足を左足踵につける	5 右足を右足踵につける	6 左足を左足踵につける	7 右足を右足踵につける	8 左足を左足踵につける	9 右足を右足踵につける	10 左足を左足踵につける	11 右足を右足踵につける	12 左足を左足踵につける	13 右足を右足踵につける	14 左足を左足踵につける	15 右足を右足踵につける

『台北高等学校：1922-1946』より